

飢饉に伴う疫病―仙台藩の場合―

菊池 勇夫

はじめに

この列島社会においても、疱瘡（痘瘡）や麻疹、感冒、腸チフス、結核、コレラなど感染症・伝染病が流行し、時に多くの命を奪ってきた。江戸時代（近世）を念頭においていえば、「疫病」（やくびょう・えきびょう）という言葉がよく使われた。疫病は流行病一般を広く指す場合もあるが、疱瘡・麻疹などと区別して、漢方医学では傷寒あるいは瘟病（瘟疫）と呼んだ熱性の伝染病（腸チフス、その他）を指す場合が多く、¹ 広狭二様の意味合いがあったことになる。以下に出てくる飢饉記録のなかの疫病は流行病のうちでも熱性の伝染病とおおよそみてよさそうである。疫病はまた疫癘・疫疾・時疫などとも書かれてきた。

近世の疫病流行に関する研究史については、海原亮の整理に委ねたいが、自身も拙著『飢饉の社会史』などで疫病に目を向け論じてきた。² 疫病はそれ自体の単独の流行としてだけではなく、他の災害に伴って発生し、複合的な災害となることも歴史中には存在してきた。「徳川日本」はおおむね内乱や対外戦争のない時期が長く続いたので、その

点は幸いしたが、稲作を基盤とした農業社会は気象災害にさらされ、大凶作ともなれば飢えが深刻化し、飢饉となることもあった。天明の飢饉や天保の飢饉などはそうした飢饉の最たるもので、疫病を伴う飢饉であった。

こうした近世の飢饉下の疫病流行は当然視されているためか、専論がそれほどあるわけではない。前掲拙著がそうした少ない試みの一つであったかと思われるが、ここでは仙台藩の飢饉に絞って、災害に伴った疫病の実態にさらに迫ってみたいと思う。旧仙台藩領地域の飢饉記録をみれば、「飢饉に疫疾附物と申世語」(『飢饉録』、藩士・源意成〔五十嵐壮右衛門〕著)^③、「凶年には氣候不正にして疫癘多く流行する者なり」(『天保飢饉録』、盛宝院廿二世法印亮雅著)^④、「凶歳には、疫病・痢病流行有之者に候」(『天保耗歳鑑』、石巻・奥野屋久策著)^⑤などと、飢饉と疫病は切り離しがたいものとして受け止められていた。ほかの東北諸藩においても同様である。幕府もまた、享保一八年(一七三三)一二月、飢饉後の時疫流行を受けて触れ出した「薬方書付」(天明・天保時にも再触)に「凶年之後必疫病流行事あり」と、注意を促すところであった。古代・中世にさかのぼれば、飢饉と疫病を合わせた「飢疫」という二字熟語がよく使われていた。^{⑥⑦}

こうしてみると、東北地方の天明や天保の飢饉は古代以来の「飢疫」というにふさわしかった。旧仙台藩領については、すでに『宮城県史』が領内寺院に残された過去帳を利用して、飢饉や疫病による死者の地域別・月別のデータを示し、記録史料とも突き合わせて、餓死・疫病死の精緻な分析を行っている。^⑧同様の分析はできないが、飢饉記録を丁寧に読み直し、災害史と疫病の関わりについて改めて考えてみることにしたい。

一 飢饉下における疫病の流行

1 宝暦の飢饉の場合

仙台藩の飢饉について、史料的にその様相がある程度具体的に知られるのは宝暦の飢饉からである。宝暦五年（二七五五）が大凶作の年で、翌六年にかけて飢饉となった。「餓死」三万人余と記すものがあるが（『仙台飢饉卷』、仙台・大内家記録⁹）。平沢要害邑主高野倫兼の『高野家記録』によると、胆沢辺の五郡で七千人、また同六年六月頃の郡奉行・目付などの話しには、藩全体の二四郡で二万人余の「餓死」という。¹⁰

仙台藩領のうちでも北部に被害が大きかった。磐井郡日形村（一関藩領）近辺では田作皆無・米穀高直のため、宝暦五年の秋より山に入り蕨の根を掘って命をつないだが、「数日」食べて「惣身はれ（腫）」の「病者」が多く、翌春になり「飢死者」は数知れなかった。とりわけ「極貧」の者は、油かすを求めて米のぬかと混ぜ合わせ、あるいは大麥のぬかを煮粉にして食べたので、自然と身体が衰え、「或は黒はれ又は至極にやせ、両眼ぬけ、かげろうのごとく死者数不知」であった（『考古史録』、日形・小野寺家文書¹¹）。

江刺郡岩谷堂の遠藤志峯『荒歳録』の観察をみてみよう。凶作年の冬を越した宝暦六年の四月になると「野山のかて物」が「自由」になり、利用しにくい「かて物」は除くようになったものの、死去する者はやまなかった。前年の冬中よりこの春までいたって「雑食」で、「自然に脾胃のいたミ」となった。味噌を持ち合わせず、塩で雑穀や山の糧物などを「煮和」えて食べた。春になり「上陽氣」が盛んになると、「全体とりしまりなく、食傷、痢病やミ出シ、瘡傷寒に変ジツ、病労死亡数しれず」となった。「産業」のある家々でも「相応の餽飯」にしたので、常の年とは

事情が替わって、「貧家」よりも「産業なる家毎」に「時行病」が多くみられ、死亡したとも記している。⁽¹²⁾

志峯は、「山のかて物」を食べる際、味噌さえもつていれば「急渴凌」になると、味噌の効用を力説していた。⁽¹³⁾塩ばかりを使った「籠食」「糧食」が身体を疲れさせ、それが次第に痲病や傷寒を発症させ、流行病へと変化していくとの認識だった。疫病の蔓延にまでは至らなかったにしても、悪食の栄養失調による飢え死から疫病死へ移行しつつあるところで、何とか飢饉状態から脱したといえようか。

さて、飢えて死に至る「餓死者」の身体の様子については、当然ながら天明や天保の飢饉記録にも書かれている。いくつかあげておこう。天明の記録では、「(天明四年)飢渴の人を見るに、其面て青ざめ、かたる声も蚊のごとし」(『天明三癸卯凶年 天保四癸巳凶年』、著者不詳)、⁽¹⁴⁾「(天明四年)閏正月と成り候処、人の色青ざめはれ来り、誠に絵に書ける餓鬼の如くになり、漸々に歩行仕り候」(『卯辰凶歳世話物語』、巨理・鈴木保造著)、⁽¹⁵⁾「麦引割稗ぬかさくづ野かて色々取ませ給候而露命助り罷在候得共、至而人体衰瘦、或は腫候者数多在之、如何様にも喰かね餓死致候者多く在之」(『南方村平井家覚書』)、⁽¹⁶⁾天保の記録では、「(天保八年二月二三日)昨日の施しにて身体一見の所、青腫れの人多く、やせ、声まで至って細く相成り候者多し。生続き覚束なく候風」⁽¹⁷⁾などとあり、青ざめ、青腫れ(黒腫れとも表現)、瘦せ衰えといった身体的症状が観察されている。それはさながら絵に描かれる「餓鬼」のようであった。

石巻の前出『天保耗歳鑑』(天保二二年二月)は、それを「気候病」と見、凶作年の翌春になると、だれでも食が進むものであるが、心ない者はそれに任せて大食し、「初は腫、後には瘦衰、骨と皮と斗に相成、終に別病なく転と死者」が幾人もあり、俗に「飢病(がしやまひ)」⁽¹⁸⁾というのだとしている。こうした病は「仏法にては餓鬼道と申教への様聞覚候。右飢病にて死者人は此世柄餓鬼道へ墮落いたすと申も、最恥敷事に候」と、⁽¹⁹⁾ここでも「餓鬼道」

という仏教的言説が引き合いに出され、「餓鬼」イメージが餓死者に重ね合わされる現実もまた死者に鞭打つ残酷であった。

2 天明の飢饉

仙台藩の飢饉のなかでも激甚だったのは、天明三年（一七八三）の大凶作に始まり、翌年秋の収穫がなるまで約一年間続いた天明の飢饉である。犠牲者の数は、源意成『飢饉録』によると、天明四年一〇月より餓死者の者が段々出て翌四年閏一月まで殊の外死亡し、四・五月には五・六歳から一二・三歳の子供の倒死も目立ち、餓死では「御領内にては十四五万人も死候半」であった。加えて三月中旬よりの「疫疾流行」によって、「都て右両様にては御領内の者三十万人も死候半と申唱」えた。⁽¹⁹⁾ また、『南方村平井家覚書』に「諸人申には、世の中の人三ヶ壺は死失申由申唱候」、⁽²⁰⁾ 『人首風土記』（伝写本の一つ）に「疫病以之外在之、御分領百万人の員数之中、疾病にて十分ノ一、十万人程も病死仕り候」、⁽²¹⁾ などともみえる。

右の『飢饉録』が述べるには、餓死者が出始めたのは天明三年一〇月頃からで、年をまたぐ厳寒期に山をなしたと思われるが、疫病の流行は翌年三月からと時期が後ろにずれていた。その通りなのかを含め、流行時期を他の飢饉記録で確認してみよう。

①三月始より世上疫病殊之外はやり、四月ニ至りければ、家毎に二人三人在之様ニ相成て、（ほ）とく死失候事。
／（四月）疫病以之外はやり、是が為に死する人又のごとし。家ごとに此病無所ハ一軒も有まじ。／（五月一七日）（二〇日頃）役病尚更盛りニ相成り、是か為ニ命ヲ落す事、かぞふるにいとまあらず。何レ之町々ニも二十軒

三十軒戸をさ、ぬハなし、珍敷疫病なり。／五月廿四五日程益々ゑきればやり、やがて死する人山のごとし。われらも五月廿九日重キ役レ（疫病）ニ懸たり。（『天明度仙台飢饉日記』、著者不詳²³）

②（天明四年一月）此節諸方疫病（疫病）大流行にて人死す事日に何人と云。遊民は所々にてたをれ死し。／同年三月より八九月迄疫病大にはやり、御城下は不及申、在々一ヶ村にて十人二十人或は家内不残死するもあり、（中略）尤四月五月は多く死したり。（『天明三癸卯凶年 天保四癸巳凶年』²⁴）

③町家在々共に年内（天明三年）より熱病小盗多く（中略）、当春（天明四年）に至、熱病弥増大、（『凶作石物高直散乱次第』、後藤定安著²⁴）

④春中々飢渴之上年中疫病相煩、家内不残死絶候者数多御座候、御村中二人数三ヶ一生き残り申候、（『諏訪神社簡粥記』、愛子・諏訪神社 / 三四月疫病大ニ流行人死申候（『暦面裡書』、愛子・石垣家文書²⁵）

⑤其上飢命死・疫病死二月々段々初、四五月毎日死亡、／（五月末・六月初頃）疫病渴命毎日死亡、不及吟味、（『加納家の記録』、真野・小嶋信春著²⁶）

⑥夫々段々世上流行致三四五月時分弥更家毎に相満、（中略）手前杯にても家内中耆人も不残流行病相病、四月廿二日今段々相病、五月初メ迄二皆々平臥ニ罷成、（『天明三癸卯大飢饉記録』、曲竹・我妻因信著²⁷）

⑦四月五月となり人死多く其上疫病以ての外はやり、家々病人多く家内死除候家数軒有之、又は悴計り残るもあり、（『卯辰凶歳世話物語』、巨理・鈴木保造著²⁸）

これよりみれば、天明四年三月～六月が流行の最盛期といつてよさそうである。ただし、それより早く、年内（天明三年）のうちから③、正月に方々で疫病大流行②、二月より始まり⑤、とするものがあり、その後八、九

月まで続いた②。春中（一月～三月）より飢渴に加え「年中疫病」④とあるように、長期にわたって苦しめた疫病だった。右にはあげなかったが、三月以前に疫病が流行していたことを示す史料は他にもある。仙台藩領北部の磐井郡の「東山北方飢渴文書」²⁰中の肝入から大肝入（鳥畑新太夫）へ出した天明四年閏正月の「疫病二而死亡相煩候者の書上」である。

それによると、天明三年一〇月より、上折壁村ではA病死四四人、B全快しない者三四人、C全快したが「疫養（療養）」一六人、下折壁村ではA四二人（男一九人・女三三人）、B一七人、C五三人、一家二人の死亡七軒、浜横沢村ではA八九人、B五一人、C六九人であった。これは、疫病を煩う者への手当としての「御困粉御貸方」に関しての書上であるが、これより前の一月二二日の大肝入の代官への困粉二五石拝借願によると、「去夏中より引通二何方村々にも五人七人つゝは疫病相煩候者在之」とし、天明二年の不作と翌三年にかけての江戸廻米によって同三年の大凶作前にすでに疲弊が顕われていたことを示している。そして、「去年十月頃より甚重ク相煩候者」が始め、「上折壁村ニ御百姓人頭三拾八人此人数百七拾四人多分疫病相煩、家内不残臥居候者ハ親類組合之内より食事取扱罷在申候、其者共も段々相煩」という状況になっていた。この疫病はいったん収まったようだが、ふたたび三月末頃より上折壁・下折壁・浜横沢三ヶ村で流行し、上奥玉・曾慶二ヶ村でも四月初めから流行した（四月一八日付、大肝入上申）。第二波といつてよいが、他地域と同様の流行に突入したことになる。

史料中の月日は旧暦で、しかも天明四年は閏月があるので、現代の感覚とはかなり違っていよう。参考に旧暦の各月朔日の新暦（グレゴリオ暦）を示しておくと、天明三年一〇月（新一〇月二六日）、十一月（新一一月二四日）、一二月（新一二月二四日）、同四年一月（新一月二三日）、閏二月（新二月二二日）、二月（新三月二二日）、三月（新

四月二〇日）、四月（新五月一九日）、五月（新六月一八日）、六月（新七月一七日）、七月（新八月一六日）、八月（新九月一五日）、九月（新一〇月一四日）、一〇月（新一一月一三日）である。流行期の三〜六月は、新暦でいえば四月下旬〜八月前半に該当し、梅雨期がちょうど流行の最中となる。

この疫病の症状については、③が「熱病」と記しているが、体験的によく知っていた症状のためか、具体的に書かれることは少ない。³⁰ 食料不足で身体が弱ったときに活性化し、流行を繰り返してきた歴史があったのであろう。これまでも指摘されてきたように、腸チフスを主とした熱性の伝染病であろうが、その猖獗ふりがいかななく記録されている。家族が次々感染し、死に絶えてしまう家もあり、村の人口が奪われていった。①や⑥の筆者もこの疫病に罹ってしまったが、死からは免れた。⑥は肝入家であるが、右の引用に続き、皆が「平臥」してしまったため、朝夕の飯仕度もできず、ようやく熱のさめた者が「頭ヲゆひ杖をつき」飯仕度をして長々の難儀を乗り切ったが、田畑の植え仕付など思う余裕もなく「今日死ル歟明日カト斗思居様」な日々だった。³¹

ただ、疫病ではなくて「悪風流行」によって家並に病人が出て煩ったとする記録がある。伊具郡角田町であるが、天明四年六月末頃か、町・城内が「はやり風」により、足軽を含めて、一日に五、六人または八、九人ずつも死亡した。薬用もならず米類を食べないために快気におよびかね果てたというのであった。その時期とすれば、前述の疫病最盛期も終わりに向かった頃の流行になる（「飢饉鑑、丸森・鈴木庄之助著」³²）。

大凶作年の翌年は、深刻な苗不足によって多くの不仕付地が発生した。天明四年の場合には加えて疫病の流行が田植えなど農耕に支障をきたしたことは、宝暦の飢饉あるいは次にみる天保の飢饉以上に飢饉記録が指摘するところである。たとえば、「（天明四年）田うへはやく心懸るといへども、飢饉疫癘のために人痛み、精力おとろひ、兎角後れ

て例年より遅し（『天明飢饉』、著者不詳⁽³³⁾）。「其中に飯料無之者、又は熱病にて遅候者は、五月廿八九日の田うへ、入梅より三十日下り秋作無心元」「田丁所々に多植付候内にも、夏中飯料無之者、又は熱病にて植付候俣にて、野草不引、田丁両様取合夥敷、御損石」（『凶作石物高直散乱次第』⁽³⁴⁾）。「天明四年」四月廿六日夕田植取付候処、（中略）村々荒所多、植付候者共病人多故草取不申荒所同然、畑作も同前」（『加納家の記録』⁽³⁵⁾）などと、田植えや草取りができなかった様子が記されている。

3 天保の飢饉

天保の飢饉は天保三（一八三二）、四年頃から同九年頃にかけて続いた（同五年のみは豊作）。天保四年・同七年が大凶作、その翌年にかけて飢饉となり、二度の山があった。仙台藩領もほぼ同様で、天保五年と同八年に飢饉に伴う疫病流行がみられ、とくに同八年のほうが激しかった。藩領全体でどれだけの飢饉死者（餓死・疫死）が出たのか、たとえば、天保八年春以来「度々之死疫癘流行」で「分領中」（仙台藩領）一〇万人ほどが死んだという当時の風聞がある（『天保凶作天候記録』、和山文書⁽³⁶⁾）。拙稿で死者数の各種データを紹介し、天保の飢饉では数万人から一〇万人の死者かと幅をもって理解しておいた⁽³⁷⁾。石巻地方や磐井郡などに被害が大きかった。天保期になると天明期とは違って、人数改帳など農村史料が豊富になるので、村ごとのきめ細かい分析が可能となる⁽³⁸⁾。

『天保荒世記』（著者不詳）は、天保三年一月三日「此節世上軽疫流行」、同七日「軽邪にて世上二病人多」、翌年二月二日「此節所々ニ疫病流行」、三月「諸方ニ疫病流行」と記す。四月一六日には名前を知る人が「疫にて病死」した⁽³⁹⁾。記事内容から筆者は仙台城下の住人かと思われるが、始めは「軽疫」であったようだ。天保四年三月、疫病流

行で行倒れの病人が多く、「困究之者」の薬用が行き届いていないとして、医学校で来る一六日より凡下・扶持人、町方寺社門前の者、諸侍宿守に「施薬」するとの達しがあった。⁽⁴⁰⁾『天保飢饉録』も、天保四年の箇所に、城下・在々ともに疫病が大に流行し、人が多く死亡したと記すが、⁽⁴¹⁾同様の時期の流行を指しているだろうか。また、天保四年秋の大凶作前のことなので、この流行を飢饉に伴う疫病とはいいたい。

飢饉状態の最初の山となった天保四・五年の疫病の流行状況からみていこう。

①当月（天保五年三月）より四五月の頃迄、疫病沢山にはやり、御城下は家ごめ村々も同じく壱軒の家にも三人位御座候。疫病にて死する者沢山に御座候事。何れ八九月の頃に罷成候得ば病氣も少々不足罷成候、（『天保四年凶作之心覚』、著者不詳⁽⁴²⁾）

②（天保五年三月二八日）去年中不気候ゆゑ、時疫流行、／（天保五年四月二九日）疫病旧冬より所々に有之候処、頃日ニ相成以ての外流行大込也。（中略）都て他郡共ニ疫疾時行ニ付、（『天保四癸巳年凶作日記附』、上胆沢水沢・江右近教直著⁽⁴³⁾）

③（天保五年三月一日）世中疫せん多く、死人多し、／（天保五年四月一〇日）世上時「疫」「」流行、死人多し、／（一一日）世中疫病多く、死人多し、（『天保凶歳日記』、藩士・別所万右衛門著⁽⁴⁴⁾）

これからすると、天保四年の冬から疫病が始めていたが、顕著になったのは翌五年三月からで、四、五月に流行し、八、九月頃には終息に向かった。ちなみに各月朔日の新暦は天保五年三月が新四月九日、四月が新五月一九日、五月が新六月七日、八月が新九月三日にあたる。天明の飢饉の流行時期とおおむね同じである。ただし、②は、引用のよう記しつつも、中略の箇所に、「先年の凶年」（すなわち天明の飢饉）の時はいたって時行（はやり）、四月、五月

頃は疫病または飢死者が沢山であつたが、このたび（天保五年）はそのようではなく、まれに疫病で死人が出ていく程度と記している。ただ、時疫のことなので、銘々が覚悟してむやみに外出することは控えたとある。「飢饉の者」はほとんどおらず、扶食を相応に持つてくる者でも「青脹になり、病臥候者」もまれにはいたが、それは過分に食べ過ぎて、「時の氣候」に当たつたからと、前述の「飢病（がし病）」と同様のことを述べていた。①や③から受ける印象とはやや異なるが、このほうが実情に近かつたかと思われる。

社会現象としては、他領から入り込む流民の死に倒れ、疫病が目立った。藩の北部に知行地があつた杉村弥兵衛の『凶歳留』に、天保五年四月頃より段々暑氣になつて「熱病」がはやり多く人が死んだが、「海道辺山々迄」も死人が多くみられ、これはたぶん「秋田他国の人なり」と認識している。⁽⁴⁵⁾ 天保四・五年はどちらかといえば出羽方面に飢饉が強くあらわれ、流民化して仙台領へ入り込んできた。⁽⁴⁶⁾ このことは③六月一〇日記事にもみえ、どこからとは書いていないが、仙台城下へ流民が入り込み、制導役四人が見当次第に召連れ、芭蕉の辻より北は大法寺へ入れ、南は下川原へ入れたと記している。筆者の目には、「兎角流民途中死倒レ候へハ、流行之疫癘ニも相成候事、被禁事ニ相見得申候」と、流民が疫病の発生源になるかと心配され、そうならないための狩り込み、隔離と思われていた。

天保七、八年の疫病流行に移ろう。流行時期に関する箇所を同様にあげておく。

④（天保八年四月三日）はしか大はやり、何れも軽し。／（五月二二日）役病はやり人多く死す。所々にて遊民たおれ、／（五月二九日）役病大にはやり所方にて人多く死す。日々そふ式有。／（七月八日）所々役病にて人多く死す。そうれい多く出る、（『天明三癸卯凶年 天保四癸巳凶年』）⁽⁴⁸⁾

⑤（天保八年四月一二日）麻疹流行、拾四五年来ニ而流行也。疫病所々ニ有、当時大流行ニあらず、／（四月二九

日) 世間病人死人多し、少し疫流なり、(『天保凶歳日記』¹⁹⁾)

⑥ (天保八年) 疫病三月頃より流行、六七月に至り甚敷八九月に及んで少し薄く、追々天保九年迄引通し流行人死する事夥し。天保八年五月前よりは六月に至り麦へ喰付てより死する人十倍なり。(『春旆夜話』、洪民・苜持僚著)²⁰⁾

⑦ (天保七年飢饉の事) 御郡中江十月上旬より在々町々浜々迄(中略) 御施粥御救助被成下、(中略) 右御粥頂戴致候程の者共は、前廉より大に弱り居候故か、千人の者は六百人は死亡、四百人は助り申事に候。(中略) 御郡中にて死亡相成者六千余人と申風聞。右死亡の者、三千人は餓死、三千人は流行病痢病にて死亡と風唱に在之候。

(中略) 十一月頃より翌年四月頃迄死亡の者多し、同五月より死亡の者稀に相成申事に候。／(天保七年不気候万変の事) 春より漆瘡、疥癬、秋分迄流行成候事、(『天保耗歳鑑』)²¹⁾

仙台藩領の内でも飢饉のダメージが大きかったのは⑦の石巻地方・牡鹿郡であった。この地域では天保七年、気候不順で秋まで漆瘡(湿瘡か)、疥癬の皮膚病が流行したという。同10月(新一月九日、朔日以下同)に困窮者への施粥が下されたが、その六割が死亡、四割は助命、郡中死亡者六千人のうち半数が餓死、半数が流行病・疫病という。天保七年の十一月(新一二月八日)〜翌八年四月(新五月五日)が盛期で、その分早く収まった感がある。天保六年も凶作年だったのでその影響も強く働いていたのだろう。⑥の磐井郡も厳しかった地域であるが、ここでは疫病が天保八年の三月(新四月五日)〜八月(新八月三十一日)・九月(新九月三〇日)、とりわけ六月(新七月三日)、七月(新八月一日)に流行した。これは天明四年や天保五年のパターンに類似している。ただ、天保九年まで流行を引きずって、長く悩まされた。

それに対して④、⑤は仙台城下からみて書かれているためか、とくに⑤は天保八年四月頃、疫病はあるものの大流行ではないとし、むしろ麻疹（はしか）のほうが一四、五年ぶりの流行として記されている。ただし、軽かったようだ。

⑥には天保八年五、六月頃、麦の収穫期になるが、麦を食いつけて死者が十倍と書かれている。前述の「飢病（がしまい）」にあたる。他記録に、「（天保八年五月二〇日）此節、所々にて、病人多分二御座候。就中、餓死負け多分二相見へ申候」（『天保年間記録』、著医者不詳）⁽⁵²⁾、「天保酉八年。正月ががしまけにて多く人民死す。（中略）人民がしまけにて、高城町にて春分七月迄にて七百人程死。初原にては四拾人程死。桜渡戸にてハ二十四人程死」（『宮城郡地方年中記録』、銀右衛門元茂著）⁽⁵³⁾ また、前出『飢饉鑑』にも「餓死負け」⁽⁵⁴⁾がみえ、「餓死負け」と表現しているものが少なくない。「飢病」と同様のものと解しておきたい。

疫病、麻疹、餓死病に加えて「風邪」の流行を記す記録もある。近江商人中井家の『近江日野資料』になるが、仙台店（中井新三郎・同長兵衛）より近江の本店（中井源左衛門・宗兵衛）へ宛てた天保八年一月三日の手紙に、「（城下以外の近在遠在山根は）渴死人夥敷（中略）、此年（天保七年）も多く死人御座候由、乍併元来粗食方に付、多分疫病にて落命仕候由、（中略）当年は疫病薄にて大悦致居候得共、昨秋よりの粗食候得ば、右病氣も自然流行仕候半歟と心痛仕り居り候」と、疫病・疫病の流行および今後の懸念について述べている。その点は他の記録と変わりがなく、同三月二一日の手紙には「専ら時疫まざりの風邪流行仕候」としている。こうしてみると、天保八年の流行は、天明四年や天保五年の「疫病（熱病）」流行と同様の傾向を基本としながら、地域によって麻疹、風邪の流行も交じり、複合的な様相を示していたことが知られる。

二 疫病・疫死者への社会的対応

大飢饉となれば、飢えの深刻化とともに疫病が人々を襲い、数多の人命を奪っていた。天明の飢饉がその典型で、天保の飢饉などもそうした側面を持っていた。あらためて飢饉には疫病が付き物、ということが同時代人の観察から実感させられることとなった、そして、ただ疫病の流行に苦しめられたというだけでなく、疫病や疫死者に対してその地域社会がどのような反応なり対応をしていたのか、そのことにも関心が向けられなければならない。

飢饉記録はそのことに必ずしも応えてくれないが、状況はある程度想像できる。天明の飢饉では、たとえば次のような記述が目に入る。

①春は急渴者共飢死、四月夕末ハ病氣ニ而死申候、御城下在々駅々共不知其員ヲ、近所合壁者病死致候迎も悔見舞等無之候、〔『天明凶歳録』、著者不詳⁽⁸⁷⁾〕

②其家耆人も不残死失申家も御座候、扱は式人参人宛死申に付、兄弟や近き親類相果候而も一向出入も無御座候。扱て哀成事に御座候。依去死人取仕舞に式貫文参貫文宛に而人相雇、野辺之充仕舞仕由。〔『南方村平井家覚書』⁽⁸⁸⁾〕

③（疫病流行、死失で）そふれ等も桶或ハ棺又菰包みて、宅届にも参ル人ハ耆人もなく、犬猫ヲ取仕廻候も同然なり、／町々商人共一字表板戸しかため、盆正月杯の休日の体なり。往還の人もまれニして甚だぶつそう第一なり、／往還何方も死人斗ニて此息重もく敷、往還穢^{きたなく}て、通る人も鼻をふさぎて過る事なり、〔『天明度仙台飢饉日記』⁽⁸⁹⁾〕

④疫癘^{エキレイ}行われ戸々人々其病になやまされすといふ者なく（中略）、疫死する者又多し、然れとも親戚兄弟^{セキ}多も其伝

染たらん事を恐れてとふらひよる者もなく、乞食を雇ひ非人をかたらひ其かばねを土に埋ミ、法筵の式も絶へ愁喪の祀りもすたれて、(中略) たま／＼此病をのかる、者は其病るもの、門にたもた、す故に、辺土なる地ハ枝茂りて天を覆へとも斧を用ひす、草深くして道をさへきれとも鎌をいれす、往来既に絶んとする程なりケレハ、市中の住居といへとも荆葛窓をうつミ(下略) (『天明録』、著者不詳)⁽⁶⁰⁾

これによると、①近所や壁を隔て隣合っている者が病死しても悔やみや見舞に行く者がない、②兄弟や近い親類でも出入りしない、③葬礼などに行く人は一人もいない、とある。それは、②③にあるように家ごとに二人、三人と死ぬ状態で、とても他家のことに目を向ける余裕がなかったからである。それだけではなく、④のように疫死には親戚や兄弟が多くいても、疫病が感染することを恐れて来る者がおらず、疫病への感染を避けたいとの意識がつよく働いていた。死人の「取仕舞(廻)」は、②人をお金で雇って野辺(墓地)に埋葬、④お金で「乞食」や「非人」を雇って屍を土に埋めてもらうとあって、他者にまかせた。僧侶を頼み、親戚・縁者が集まり葬礼を営むことができなかった。④によると、疫病からたまたま逃れられた者も病者の家に近づかず、そのため「辺土」(田舎、農村)では枝茂り草茫茫となつて往来が絶え、市中の住居も荆や葛に窓をふさがれる有様だった。③の城下の商人が表板戸を堅く閉じていたのは、不景気で商売が成り立たず盗みや物乞いへの防衛という側面もあるが、疫病から身を守るためでもあっただろう。往還を歩く人は城下でも少なく、引き籠りの暮らしといつてよかつた。その往還もいたるところに行倒れの死人が多く、放置されたままの死臭による汚さで、鼻をつまんで通つたという。

天保の飢饉でも、「病人ありとも見聞人もなく死人ありても悔む人なし、一向常の如くにして忌中と云も弔と申ものなし」(『春旃夜話』)⁽⁶¹⁾ などとあり、天明の飢饉ほどではなかつたとしても人々の間は隔絶していた。多く述べる必

要はないだろう。

『天保飢饉録』によると、石巻の永巖寺の西裏に大石を立てて、「天保七八飢饉亡霊、有無両縁三界万霊」と刻んだ塚があった。ここは餓死者を幾人となく一穴に捨て置き、追々土を覆い、碑を立てた所で、「実になしむべき事」であった。筆者によれば、その頃半日も旅行すれば、路傍に死骸を見ないことはなく、検使の役人が来て調べるということもなく、犬・鳥が喰い裂き醜気が鼻をさし、やむなく路傍に埋めるのがせいぜいであった。⁽⁶³⁾

また、仙台城下では天神下へ「流民御救」の小屋が建てられた。そこで粥の施行があり、小屋内で病氣となった者には薬を与え、死んだ者は棺に入れて葬り、金勝寺で法名を授、日々施餓鬼の供養を修行した。これは大町佐藤助右衛門と河原町錦織氏の兩人の手配という。⁽⁶³⁾『近江日野資料』(「仙台店天保八年手紙」三月廿一日)にも、「旧冬より春に相渉り流民死人不怪候由承申、右に付、於御上様に施餓鬼御施行、天神下於徳泉寺過日廿五日より二夜三日の御修行。尚亦同所金勝寺にも御同様に被為相行」と書かれている。⁽⁶⁴⁾金勝寺には「天保九年三月日建」の「丙申殍氓叢塚之碑」があり、その碑には佐藤季明(助右衛門)の事績とともに「其の疫死者久しく餓え驟かに食ひて亡する者凡そ二千七百余人なり」と刻まれている(「叢塚の事」)。⁽⁶⁵⁾餓死者・疫死者の扱い、供養については述べるべきことが多いが、この程度にとどめておく。

疫病流行の際にはその退散・予防を願って、修験など宗教者の祈祷・呪力への期待、そして地域社会における疫病送りなどの行事が行われ、ますます盛行・盛大になっていった。そのように考えられている。しかし、天明の飢饉下の疫病流行の時期に、ここで取り上げた飢饉記録をみる限り、住民が関与した修験・寺院の祈祷あるいは疫病送りの行事を記すものがない。餓死から疫死へ飢饉状態がさらに悪化し、世間が隔絶状態になっているところで、実施の仕

様がなかつたというのが現実であつた。大寺はともかく、小さな寺庵や修験も生死の際にあつた。そのようにみるほかないのではないか。

天保の飢饉となると、天保五年の流行時には、寺社による祈禱が活発であつたことがみえる。ここでは上胆沢水沢の例をあげておこう。『天保四癸巳年凶作日記附』によると、天保五年三月二十八日の記事に「去月中より所々にて五穀成就の御祈禱あり。当所にも、八幡二もあり。袋町の天王様二も、五穀成就。尚去年中不気候ゆゑ、時疫流行、諸人難儀致し候二付、百ヶ日護摩祈禱有之、今日御城内町場共二御神輿被相廻候事」とあるのをはじめとして、四月二十九日「都て他郡共二疫疾時行二付、御上様より御国中所々にて、疫病消除、五穀成就の御祈禱被成下候。当郡ハ塩釜にて法妙院、威徳院、多宝院、被仰付候。其外近辺の法主方大勢にて、廿九日より二夜三日大般若御祈禱也」、五月二日「殊ニ大般若転読二付、郡中参詣仕候やう、被仰付候付、塩釜へ参詣の者群集夥し。七月十日の祭日にも増り候事なり」、(五月)頃日「万日金毘羅さまにて疫病消除御祈禱あり」、(五月)廿四日「文殊堂にて、五穀成就、疫病消除御祈禱あり。六丁共二川口町ハ大日さま、立町ハ秋葉さま、大町ハ文殊堂、横町ハ御駒堂、袋町ハ天王さま、壺丁々々に御祈禱あり」と記されている。⁽⁶⁶⁾五穀成就と合わせ、時疫流行、疫病消除の護摩祈禱、大般若祈禱が藩命で行われ、神輿が繰り出し、住民の参詣が促されていたことがわかる。

天保五年は天明四年に比べればはるかに緩やかだったので、このような祈禱の余裕があつたといふべきか。それより事態が深刻だつた天保八年はどうだつたのであろうか。まだきちんと確かめていないが、同五年ほどには執行できなかつたのではないか。いづれにせよ、宗教はどれほど呪力を効かそうとしても疫病には無力をさらし、役割はむしろ死者供養にこそあつた。